

# 知求会ニュース

2008年05月

第26号

## ◎ 博士前期課程、入学おめでとうございます！

2008年4月8日火曜日午後1時30分から宇都宮市文化会館にて、2008年度入学式が開催されました。学長式辞は宇都宮大学 HP(アドレスは下記参照)に掲載されています。

宇都宮大学 HP (<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/gakucho/shikiji-nyugaku-20.html>)

今年度の入学者は、国際社会研究専攻の第10期生 欧国青さん、大宅宏幸さん、近藤香さん、篠田一輝さん、謝静川さん、田中美香さん、張強年さん、尤迪さん、李雪玉さん、渡邊麻衣さんの10名と国際文化研究専攻の第10期生 猪股亨子さん、金徳淑さん、胡涵さん、匂坂宏枝さん、肖迪さん、相馬敦さん、孫一希さん、崔仁叡さん、趙敏さん、馬振さん、Van Stolk, Brenden Gabriel さん、人見千佐子さん、前泊秋乃さん、宮原崇晃さん、楊文婷さん、李徳元さんの16名、そして、国際交流研究専攻の第5期生 青砥真生さん、閻偉超さん、KUNIO SUENAGA さん、SINAVONG PHONEVILAY さん、謝俊巍さん、周嘉能さん、関根功人さん、PHORASSAMEE JIRARAT さん、前川麻美さんの9名で、計35名でした。

## ◎ 博士後期課程、入学おめでとうございます！

今年度の入学者は、国際学研究専攻の第2期生 金多希さん、金裕美さん、SAR SOCHEA さん、蔡佳樹さん、福田一夫さん、藤田達雄さん、楊凡さんの7名でした。なお、博士録コーナーで自己紹介文がありますので、併せてご覧下さい。

## ◎ 博士後期課程、進学おめでとうございます！

イルマ・ルイザ・フローレス・フローレス(国際文化研究専攻・7期生)さんが、東京大学大学院 博士後期課程 総合文化研究科 地域文化専攻に進学されました。

## ◎ 着任教員紹介その9

田口卓臣 (TAGUCHI Takumi)

専門：フランス文学・思想

前職：大学講師

趣味：自転車、食べ歩き、映画鑑賞(かつては年間200本以上見ていました)

自己紹介：

担当授業は、フランス語、フランス文化論、西洋現代思想などです。主に十八世紀フランスの文学・思想を研究しています。この研究の一環として、一昨年、思想家ドニ・ディ

ドロの小説『運命論者ジャックとその主人』（白水社）の翻訳を出版しました。現在は、古今東西の思想史のなかでくりかえし問われてきた「逸脱」の問題について考えています。人間はなぜ自らの生を規格化しようとするのか。しかもなぜ、そのように規格化＝平準化された生から逸脱する者たちが出てきてしまうのか。この古くからの問いを問いなおすことは、グローバル・スタンダードなどという空疎な「規格」が大手をふるう今日において、単なる学問を超えた実践的な意味を持つと思います。私はつい最近、妻と、生まれただけはやほやの娘をつれて宇都宮に引っ越してきました。休みの日には街中をぶらぶらと自転車でまわっています。見かけたら声をかけてください。

### ◎ 掲載記事紹介

1. 東京新聞(平成20年3月20日発行)に、北島 滋先生による「街へ誘う」と題する寄稿文「遊・誘空間の形成 にぎわいある街は楽しい」が掲載されました。
2. 東京新聞(平成20年3月27日発行)に、北島 滋先生による「街へ誘う」と題する寄稿文「ホコテンを設ける にぎわい回復の手段に」が掲載されました。
3. 東京新聞(平成20年4月3日発行)に、北島 滋先生による「街へ誘う」と題する寄稿文「ホコテンのメリット 祭りのにぎわいに便乗」が掲載されました。
4. 東京新聞(平成20年4月11日発行)に、北島 滋先生による「街へ誘う」と題する寄稿文「にぎわいのヒント ホコテンを線から面へ」が掲載されました。
5. 東京新聞(平成20年4月24日発行)に、北島 滋先生による「街へ誘う」と題する寄稿文「市街地とLRT 楽しい空間つくる要素に」が掲載されました。

### ◎ 国際学部だより

国際学部 3 期生の澤田哲生さんが、パリ東大学で人文学博士号を取得されました。国際学部としては、国際学部同窓会会長の吉葉恭行さん、大学院国際学研究科同窓会副会長の李 尚珍さんに続く、博士号取得者です。今後の研究・教育分野へのご活躍が期待されます。知究人コーナーに博士号取得経過報告がありますので、併せてご覧下さい。

国際学部同窓会の資金提供により、県内大学で初めて、国際学部の授業に**ポルトガル語講座**が開講されました。講座内容は、対象学年が2年生で、外国語特別講義Ⅰ（文法の基本を習得し、辞書を用いて簡単な文章の読み書きを学ぶ。）と外国語特別演習Ⅱ（基礎実用会話を実践）の2講座です。問い合わせは、**宇都宮大学学務部修学支援課** 電話028-649-5084、FAX028-649-5095まで、お願い致します。

**研究室訪問 17** 第9号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。第17回目には、本年3月31日に定年退官された元・地球文化形成研究講座所属の軍司 敏先生にお願いしました。（原稿受理3月12日）

## 「退職にあたって思うこと」

軍司 敏

この3月に停年退職いたします。最終講義には修士修了生の方も何人か御出席くださいますようお願いいたします。

私の研究はフランス現代思想ということですが、J・P サルトル、メルロ＝ポンティ、ミシェル・フーコーが中心です。サルトルからは独立した人間の自由の大切さを、メルロ＝ポンティからは人間の原初的存在は独立した個人ではなく共同存在であることを学びました。この両者は実存主義の潮流に属し、人間の自発的で主体的な在り方を強調します。実存主義的思想の克服を目指したフーコーからは実存主義者の強調する主体はどのようにして造られたのかということについて教えられることが多くありました。フーコーに依れば、人間の理性をどこまでも信頼し楽観的な世界観を表明する近代の啓蒙思想は、自らを支える影の部分として規律・訓練をも考案した。規律・訓練こそが西欧の経済的離陸を可能にし現在の豊かな社会を産み出した。しかし規律・訓練によって造られた主体からなる社会は監視し、監視される社会である。そしてフーコーは云う、「我々は近代の産物である規律・訓練に代わるものを見いだせず、相変わらずそれを手放せないままでいる。」フーコーのこの台詞は現在の私たちひとりひとりに重く押しかかっているような気がします。

大学院生については、真っ先に心に浮かんでくることは学位授与式の雰囲気です。学部生の授与式は華やかで明るいのにたいして、大学院生の授与式は厳粛で緊張した雰囲気に包まれています。ここには大学院生の学問に対する態度が反映されているような気がします。この学問に対する真剣さの故にでしょう、私のもとで修士論文を書いた院生は勿論のこと、私の授業に参加してくれた院生諸君のことが懐かしく思い出されます。数年前の修士修了生の皆様方から頂戴しました鉢植えの花（カランコエ？、名前はうろ覚えですが家族が世話をしています）は今年も私を楽しませてくれています。この花のように皆様方のお仕事が年々発展されますようお祈りしています。それとあわせて、国際学研究科の今後の発展にこれまでと同様のご支援をお願いいたします。

最後に私事にわたりますが、在職中は本を読むとき無意識のうちに授業や研究のことが頭にあり読書の楽しみを忘れていました。退職後は読書の楽しみを若い時のように味わうつもりです。

**博士録 03** 第22号から今後の博士誕生を鑑み、新コーナーを設けました。第3回目には、今春宇都宮大学大学院 国際学研究科 博士後期課程に入学した、**金 多希**(国際文化研究専攻・第8期生)さん、**金 裕美**(国際交流研究専攻・第3期生)さん、**SAR SOCHEA** さん、**蔡 佳樹**さん、**福田一夫**さん、**藤田達雄**さん、**楊 凡**(国際交流研究専攻・第3期生)さんらにお願いしました。(学籍番号順)

①氏名：金 多希 (キム ダヒ)

②出身大学院：宇都宮大学大学院 修士課程 国際学研究科 国際文化研究専攻

③専門：比較文化、比較文学

④指導教官：丁 貴連 教授

⑤趣味：インターネット、ゴルフ、映画、読書、ゲーム

⑥研究テーマ：「悪女」から見た東アジアの女性～近代韓国文学を手がかりとして～

⑦自己紹介：

韓国ソウル出身の留学生です。2000年の4月、日本語を学ぶために来日し、日本語の研究を終え、より深い研究をしたいと思い、宇都宮大学の国際学研究科で近代文学における女性像について研究しました。現在、宇都宮大学博士後期課程で、新たな自文化の発見から日本とも比較を試みて視野を広げたいと思っています。

①氏名：金 裕美 (きむ ゆみ)

②出身大学院：宇都宮大学大学院 修士課程 国際学研究科 国際交流研究専攻

③専門：文化人類学

④指導教官：柄木田康之 教授

⑤趣味：旅行、刺繍、食べ歩き

⑥研究テーマ：観光開発を背景としたトン族の女性と彼女たちの生産する工芸品について研究します。

⑦自己紹介：

はじめまして、金裕美と申します。2年前、中国好きが高じて宇都宮大学の修士課程に入学しました。素晴らしい先生方との出会いで、どうにか修士論文を書き上げることができました。博士課程もがんばります！とにかく、充実した研究活動多くのフィールド調査を目指して頑張ります。よろしくお願ひします。

①氏名：SAR SOCHEA (サ ソチャ)

②出身大学院：吉備国際大学大学院 修士課程 社会学研究科 社会学研究専攻

③専門：社会学

④指導教官：磯谷 玲 教授

⑤趣味：音楽を聴くこと、スポーツ

⑥研究テーマ：日本的経営の現状と今後の変容

⑦自己紹介：

初めまして。カンボジアから参りました SAR SOCHEA と申します。日本に来て3年目になりました。2006年1月22日に日本に来て、吉備国際大学大学院社会学研究科修士課程に入学しました。この2年を通して自分の専門をはじめ、日本の文化や習慣などを勉強させていただき、ボランティア活動や地域活動などにも参加させていただきました。

様々な活動を通して日本のよいところだけではなく欠点も少し理解できるようになりました。今後カンボジアを考えるために大変重要だと思いました。2008年4月8日に宇都宮大学大学院国際学研究科博士後期課程に進学しました。研究テーマはまだ、ちゃんと決めていないのですが、目的としては日本的経営に関することを研究したいのです。今後、カンボジアを発展させるためには、先進諸国の日本的経営のやり方や日本人の考え方を導入すべきだと思います。

新環境に移動して来てその環境に慣れるまでちょっと時間がかかりますが、これからの環境では自分の幅を広くしていきたいし、自分の欠点を見直していきたいと思います。宇都宮大学では、留学生が多いので異文化を理解し合う貴重なチャンスになります。私はまだ日本語が十分ではないので、これからもっと友達を作り、コミュニケーションの機会を増やしたいと思います。これからどうぞ宜しくお願いいたします。

①氏名：蔡 佳樹 (サイ ヨシキ)

②出身大学院：台湾 長栄大学日本研究所 修士課程 日本研究専攻

③専門：日中翻訳

④指導教官：吉田一彦 准教授

⑤趣味：音楽鑑賞、旅行

⑥研究テーマ：日文中訳における連体修飾語の取り扱いに関する研究—台湾人訳者の問題点を中心として—

⑦自己紹介：

台湾から参りました蔡佳樹です。大学から日本語の勉強を始め、修士論文では日中翻訳について研究しました。ここ最近の6年間、日中翻訳業務に携ったことから、自分が翻訳に対して深い興味を持っているということを改めて確認いたしました。しかし一方で、自分自身のスキル不足と専門知識の欠如をも深く感じいました。そこで、自分自身の翻訳に対する考え方を整理すると同時に、疑問を解明し、不十分な点を補うために、翻訳の研究を続けることを決めました。まだまだ未熟者ではありますが、これからはプロの翻訳者を目指して頑張っていきたいと思います。

①氏名：福田一夫 (ふくだ かずお)

②出身大学院：放送大学大学院 修士課程 文化科学研究科 文化科学専攻 政策経営プログラム 吉田順子研究室

③専門：経営学。特に、ノーマライゼーションの実現に向けた人間観という問題に関連した人的資産管理論

④指導教官：(主指導教官) 田巻松雄 教授、(副指導教官) 今井 直 教授、高際澄雄 教授

⑤趣味：音楽鑑賞。特に矢沢永吉と浜田省吾が好きです。他に、下手ですがデジタルカメラ等。

⑥研究テーマ：福祉政策と労務（社会）政策を取り持つ（私的）マネジメントにおける統合理論の発見（仮）

⑦自己紹介：

私は学際におけるエリートではありません。中学も不登校。そのため、商業高校へ。そこでたまたま1番になり、語学の獨協大学へ。その後は病と闘いながら、14年間郵便配達をしてきました。現在は辞職し"体裁の良い遊び人"と称しています。言い訳になりますが、皆さんに比べて、語学、数学の基礎が全く異なります。言い忘れましたが、歳は1969年8月4日生まれの38歳。宇都宮大学と同じ敷地内にある放送大学大学院の出身です。度重なる敗者復活の機会で、ここまで来ました。経営学との出会いは大学2年の必修科目「経営学総論」。以来、労務政策やマネジメント思想の史的考察、環境が経営問題になると、ギリシャ哲学とキリスト教の出会いを中心に環境問題の史的考察。末端労働者としての自らの関心から、末端労働者（組合員）の自由と権利の確保の問題。そして今回、究極的人間観である（精神）障害者の問題へと矛先が向いてまいりました。

①氏名：藤田達雄（ふじた たつお）

②出身大学院：コーネル大学大学院 修士課程 国際農業農村開発専攻

③専門：国際協力

④指導教官：友松篤信教授

⑤趣味：旧車のレストア

⑥研究テーマ：サブサハラ・アフリカの開発援助における社会配慮の検証

⑦自己紹介：

30年前の1978年4月に宇都宮大学農学部農学科に入学し、農業技術協力を志しました。アフリカへの思いが募り、ヴィクトリア滝を見たりタンザニアとザンビアを結ぶタンザン鉄道で旅したことが学生時代の良き思い出です。大学卒業後、青年海外協力隊に参加し、ケニアの稲作普及に従事しました。

その後、福島県職員、アジア経済研究所開発スクール、米国留学を経てJICAのジュニア専門員に採用されました。それ以来、JICAの派遣専門家として、ラオスとケニアで計10年にわたり勤務しました（<http://project.jica.go.jp/kenya/5155099E0/index.html>をご参照ください）。昨年からは、JICA 筑波で途上国の農業研究者向け研修コースの指導員を務めています。

学部生時代に恩師から聞いた「開発における社会経済的要因」の一端を解明すべく、本研究科への入学を決意しました。よろしくお願いたします。

①氏名：楊凡（ヤン ファン）

②出身大学院：宇都宮大学大学院 修士課程 国際学研究科 国際交流研究専攻

③専門：日中言語の対照研究（主に同形語を中心に）

④指導教官：佐々木一隆 教授

⑤趣味：本を買う、読むこと。

⑥研究テーマ：属性形容詞における日中同形語の対照研究

⑦自己紹介：

中国の北京から参りました楊凡と申します。元々北京外国語大学のドイツ語専攻ですが、日本語を勉強したくて、二年生の時に、大学を止めました。その後、留学生として、憧れた日本に参りました。

目白大学の卒論を書くきっかけで、本格的に日中同形語の対照研究を勉強し始めました。中国語と日本語は同じ漢字という媒体を用い、両国の学習者にとっては、親しみが感じられます。しかし、同じ漢字を用いても、意味は必ずしも同じとは言えません。漢字の伝来が既に何千年以上の歴史を持ち、その長い交流史の中で、文化・習慣など要素の影響で、本来漢字意味の一部分を失ってしまいました。これは歴史の必然性とも考えられます。そして、その失われた部分の代わりに、日本人独自の意味を加えて、現在日本語の中にある漢字の姿です。

修士課程では、以上のような問題意識を抱き、佐々木先生と吉田先生のもとで、漢字「大」「小」を含む日中同形語の対照研究を行いました。沢山の課題が残され、引き続き博士後期課程で解明したいと考えました。博士後期課程は毎日忙しいと思いますが、悔いのないよう研究に励みたいと考えています。最後となりますが、皆さんと一緒に博士号を目指して、頑張っていきたいと思います。

**知究人 07** 第 9 号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうびと)を設けました。第 26 号の第 7 回目は、パリ留学を終えた軍司研究室 OB の澤田哲生氏です。(知求会ニュース 2004 年 5 月配信済の知究人 02 コーナーでパリ留学報告を掲載していますので、併せてご参照下さい。)

## 博士論文執筆報告

澤田哲生

宇都宮のみなさまご無沙汰しております。国際学部三期生の澤田哲生です。2007 年末に博士論文を留学先のパリ東大学(旧パリ第 12 大学)に提出しました。このたび OB の土屋さんから博士論文の内容と執筆経過を報告するように依頼を承りましたので、下記に簡単にお伝えします。

博士論文のテーマは「現象学と現象学的人間学における情動性の問題系 *Problématique de l'affectivité en phénoménologie et en anthropologie phénoménologique*」です。本論が三部構成で 440 ページほどになります。第一部で、フッサール(1859-1938)というドイツの哲学者が提示する「情動性」の概念を研究しました。第二部で、同じくフッサールの提示する「空想」の概念を研究し、二つの概念の内的なつながりを提示しました。これを「空

想・触発の現象学」と名付け、この現象学が精神病理上の問題を解明する一つの方法となることを第二部の最後で結論として提示しました。第三部では、「空想・触発の現象学」を方法にして幻影肢の現象（四肢切断後の感覚）を分析しました。最終的に、知覚の水準における現象学の諸概念は人間の健全な行動を分析対象とするのに対して、情動性の水準におけるそれは非正常な行動等々、広範な事象への適用が可能であるという結論に至りました。

執筆の経過についてご説明します。2003年9月に渡仏して、最初にパリ第12大学（当時）のDEA（Diplôme d'Etudes Approfondies）課程に入りました。この課程は、現在修士課程2年に統合されておりすでに存在しませんが、当時は博士論文執筆のための準備課程という位置づけでした。2004年7月にこの課程を修了し、新学期から博士課程1年が始まりました。DEA課程までメルロ＝ポンティ（1908-1961）というフランスの哲学者の思想を研究していましたが、この時に指導教員のマルク・リシール教授からフッサールを研究することの重要性を教えられ、博士論文のテーマをフッサールの情動性概念に絞りました。博士一年目は、フッサールを読む作業に費やされました。二年目（2005/2006年度）の2006年1月から博士論文の執筆作業が本格的に始まります。第一部を同年7月に書き終わりました。博士三年目（2006/2007年度）の2006年末に第二部を書き上げ、翌2007年の5月に第三部、7月に全体の執筆が終わりました。博士四年目の11月までの期間は、全体をブラッシュアップする作業に費やされました。またこの間にリシール教授と共に他の審査員3名を誰にするか決めました。3名から審査参加の受諾をいただいた後、12月に大学に博士論文審査に関連した書類を提出、審査の運びとなりました。

審査（Soutenance）は4月11日の15時から公開で行われました。最初に、博士論文提出者（私）が20分程度の口頭発表を行い、その後、指導教授を含む4名の審査員との質疑応答に入ります。フランスの質疑応答は、単刀直入に質問を提起する形式ではなく、質問者が自らの見解を長く練り上げながら最後に問いを提出する形式です。その間メモを採りながら、各見解を最後に提示された、いくつかの質問と総合して、答えるのは集中力とエネルギーが必要とされる作業でした。質疑応答の後、成績の発表、学位（人文学博士：「哲学および認識論」）の授与という流れです。終わった時は19時を越えており、濃密な時間の流れに驚くのと同時に、無意識に蓄積されていた疲労で、しばらくの間、心の中が真っ白な状態となってしまいました。博士号授与を審査委員長が発表した後、ささやかなパーティー（Petit Pot）がその場で催されました。先ほどまでの真剣な議論がうそのように、審査員、パリ国際学生都市・日本館の学友、パリの友人達と歓談の一時が訪れます。軽食の準備を担当してくれた日本館学友達の友情には、ただただ感謝するばかりです。長時間にわたる厳しい議論とその後の和やかな歓談、フランスの博士論文審査には異なる二つの顔があることを実感したのは、興味深い体験でした。

審査を終え、博士論文をもう一度読み返してみると、やはり課題が多く残っているような印象を受けました。フッサールの研究を本格的に始めたのが遅く、概念の理解、ドイツ語の読解能力、さらにそれ以前にフランス語での論じ方、議論の進め方、等々、課題は数え



切れないほど多く残っているように思われます。博士論文の執筆は終わったにせよ、残った課題は向学の重要な動機であり、これからも真摯に向かい合っていきたいと思います。反対に、留学4年半の収穫は、専門領域の拡張です。渡仏前は、メルロ＝ポンティ研究が専門でしたが、フッサールをドイツ語で読み解く作業、精神病理的な現象の分析にまで専門の領域が広がりました。厳しくも入念に指導をしてくれたリシール教授の存在が大きかったからだと思います。

さらに宇都宮時代から続く友人諸兄との通信連絡は、専門領域に踏み込まずリラックスして心を開ける貴重な時間であり、過酷な留學生活の中でとりわけ貴重な癒しの場でした。一人で生きているわけではないことをつぶさに実感しました。5月中旬の帰朝後は、東京大学大学院総合文化研究科の博士後期課程3年、日本学術振興会特別研究員としてまた新たな生活が始まります。宇都宮に行く機会もありますので、その時は、ご報告も兼ねて楽しく昔話ができればと思います。環境は変わりますが、フランス時代の研究に対する情熱と意志を忘れずにこれからも精進していきたいと思います。

**フォーラム** 第4号からこのコーナーをラテン語のフォーラムとします。2008年の臯月を迎えて、皆様慌しいことと思います。(原稿集めに苦勞しています。) 今回は、国際社会研究専攻第7期生の北島研究室OG・津金麻希子さんをお願いしました。

### 「社会人2年目を迎えました！」

津金麻希子

大変ご無沙汰をしております。先生方、同窓生の皆さん、お元気でお過ごしですか？この4月をもって社会人も2年目に入りました。周りにあたたかく見守られながら働くことができた1年でした。ただ宇都宮になかなか足を運ばず……キャンパスや研究室、美味しい餃子が恋しいですね。

現在私は、主婦や幼稚園ママ、OLと様々な世代の女性に向けたフリーペーパー・媒体を発行している広告会社で働いています。広告代理店の役割もあり、PR活動やプロモーションを実施する会社でもあり、何と定義づけていいのかわかりにくいのですが、「総合女性マーケティング企業」と会社では謳っております(詳しくはHPを⇒<http://www.lps.co.jp/>)。

その中で私は主婦の読者組織を管理・運営し、企業からの要望、どうしたらこの商品を効果的にPR、販売促進できるか、というお題に合わせた企画提案をしています。具体的には、消費者(主婦)のニーズを探るために、アンケートや商品を試してもらってデータを回収したり、実際に新商品のサンプルを配って広めたりと、毎日パソコンに向かいつつ、社内で顔つき合わせてアイデアを練っています。

一家に一台のパソコンが普及し、欲しい商品を見つけて、選んで、購入して、届けてもらう、ここまで全てインターネットがあれば可能な世界で、紙メディアは厳しいのが

現状です。紙だけではなくテレビやラジオ、インターネットや携帯、クチコミ(話題にさせる)とあらゆる「メディア」を合わせて展開することが企業からは求められています。消費者(主婦)のニーズも1つや2つではなく、私が社会人になる前からニーズを掴むこと自体が難しいといわれてきました。逆に、1つでもニーズを掴んで、ピッタリ当てはまるモノを送りこんだときの反響、そこからの広がりを生み出せたら大きなチャンスになります。インターネット上で「クチコミが広がる」というのが、まさにその現象だと思います。これをどうやって生み出すのか。広告業界の課題の1つだと短いながらもこの1年間で感じたことでした。

今後も情報には敏感に、それを選別し、見極める知識を増やしていきたい。皆さんとも久しぶりにお会いして、それぞれの近況をお聞きしたいと思っています！

(国際学研究科 国際社会研究専攻 第7期修了生)

### 重要

#### ◎ 「宇都宮大学基金」への寄付申込のお願い

4月16日付けの公式文書により、菅野長右エ門・宇都宮大学長から国際学研究科同窓会宛へ、正式に「宇都宮大学基金」に対する寄付申込の協力要請がありました。

この「宇都宮大学基金」の目的は、近年の国からの交付金減額に対する財政基盤を補完するものです。また、少子化による大学間の競争が熾烈を極めてきている現実もあります。大学側からの寄付申込書に記された寄付目的に、6項目が挙げられています。①基金事業であれば何れでもよい。②学生等に対する支援のため。③外国人留学生に対する支援のため。④国際交流の支援のため。⑤教育研究活動等への助成のため。⑥キャンパス環境の整備・充実のため。この目的の中で、特に国際学部・国際学研究科が目的とすべきは、②③④が重点として考えられます。

国際学研究科のOBやOGには、他研究科に見られない大きな特徴があります。それは、留学生の存在の大きさです。国内に留まる同窓生、外国に戻る同窓生と多様性に富んでいることです。難しいことは自明ですが、ぜひ口コミで、同級生・先輩・後輩にネットワークの輪を広げて、「宇都宮大学基金」に対する協力の結果に、心意気を示したいものです。なお、設立趣旨の詳細や寄付の申込みなどについては、宇都宮大学HPの宇都宮大学基金をご覧ください。<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/kikin/index.html>

---

**編集後記**：限られた時間でのニュース発行、同窓生の皆さんのご感想はいかがでしたか？ぜひ、今後の紙面に反映させていきたいと思っておりますので、メールを下さい。また、皆さんの記事も受け付けますので、近況報告や研究報告などさまざまな情報をお寄せいただければ幸いです。 **同窓会会員の皆様へのお願い**：  
**住所、勤務先およびメールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。** [chikyukai@yahoogroups.jp](mailto:chikyukai@yahoogroups.jp)